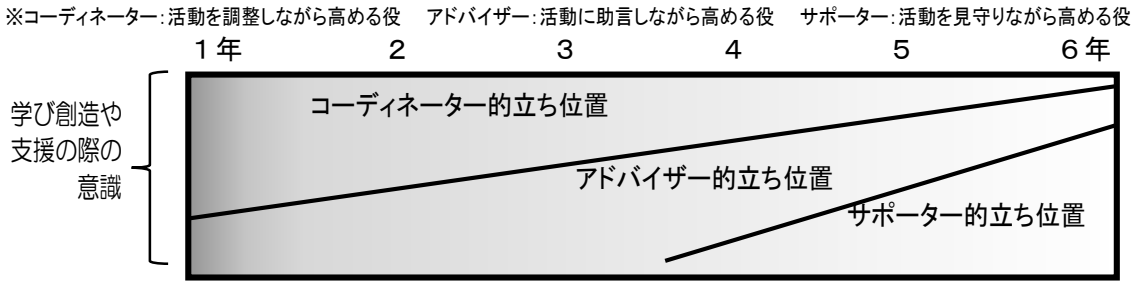
＜様式＞

学校名	山形市立大郷小学校 山形市大字中野 506 番地 TEL 681-8472　　FAX 684-6292	校　長	豊田　博之
		研究主任	東海林　陽子
研究主題	『自ら愉しいくらしを創る子ども』（１年次） ～「子ども主体の学び」を足場に据えて～		
研究主題設定の理由	戦後において最も大きな教育改革と言われている学習指導要領の改訂から４年目を迎えた。それに伴って、第６次山形県教育振興計画や山形市教育大綱等も見直しが図られ、「資質・能力ベース」の教育の具現化に向けて本腰を入れて取り組むべき時期に差し掛かっている。子どもたちの実態や教育課題を明らかにしながら、教育活動を見直していく必要がある。 本校の子どもたちは、とても素直で、前向きに学校生活を過ごしている。また、高学年の子どもたちを中心に、自分たちでくらしや学びを切り拓いていこうとする気運も高まってきている。しかし、自分の考えで行動に移すことに自信がもてない傾向が強いため、学びや活動に対する子どもの遣り甲斐を高め、活動プロセスにおける自分の変容に気付き、自信を高められるように支援していかなければならない。 そのためには、「子ども主体の学び」が必要不可欠であり、年間を通して「子どもの育ち」をマネジメントしていかなければならない。その土台となるのが、日常的な子ども主体の「くらしづくり」であると捉えている。 以上のような教育的ニーズと子どもたちの実態を鑑み、新たな研究主題を設定し、研究の３つの柱「主体性」「協働性」「自立性」をもとに、『子ども主体の学び』に焦点をあてて、行事や児童会活動・教科・総合的な学習等の子ども主体の授業や教師の支援について追究することにした。その教育の営みを確立することで、研究主題に繋がっていくものと確信している。		
研究の目標	**子どもの実態や学習指導要領の趣旨を踏まえ、子どもの育ちに向けた「子ども主体の学び」や「子ども主体のくらし創り」について、日常的に追究していく。**		
研究の内容	**（１）「はじめに子どもありき」** 単元づくり・授業づくりの始めの一歩は、「何を教えるか」ではなく、「子どもの実態から、どんな教師の願いを描くか」であり、「子どもの興味・関心から、どんな活動を展開していくか」である。この考え方を『はじめに子どもありき』と言う。 「子どもたちの実態は、こうだから…」「子どもの興味・関心はこうだから…」子どもを主語に置いた授業づくりを心がけていくことは、資質・能力ベースの教育には欠かせないことと捉えている。 **（２）「子ども主体の学び」と「教師の立ち位置（意識）」** 教師には「させたい活動」がある。しかし、子どもたちの思いが乗らない状況で、その活動に取り組ませれば、教師主導に陥ってしまう。単元や授業をどのように展開すれば、子どもたちは、教師が		

「させたい活動」の必要性に気付くのか・・・そこに教材研究の醍醐味がある。教師の願いに近づけるために、『はじめに子どもありき』を意識しつつ、『子ども主体の学び』を創造していくことが重要と捉えている。また、授業の中での教師の立ち位置（意識）について、本校では以下の図のようにイメージしている。



（３）「子ども主体の授業」におけるイメージの共有

子どもの育ちを実現するには、全教職員で「子ども主体の授業」のイメージを共有することが、極めて大切である。本校では、授業づくりの３つの柱を『①**主体性**…自分ごとになる価値ある学び　②**協働性**…必要感ある仲間との交流　③**自立性**…自らのあり方への気付き』とし、授業づくりの大切な要素として捉え、全ての教育活動を創造する際に活用している。

研究の方法

（１）日常的な教育活動における子ども主体の追究

①「くらし」の創造

学校行事や児童会行事、委員会活動では、子どもたちが強い課題意識をもって、自分たちの手で活動を切り拓き、互いに関わりながら取り組んでいけるように、具体的な教師の支援や児童理解のあり方等について教職員ＯＪＴにより学び合っていく。

②「カリキュラム・マネジメント」（以下、「カリマネ」と表記）の推進

カリマネは、日常的に「子どもの育ちをマネジメントすること」である。子どもにとって、やり甲斐のある活動を通年にわたって繋げていけるように、「教育課程」並びに「学級経営案（学級カリキュラム）」について、十分に吟味して作成しなければならない。また、学級経営案（学級カリキュラム）は、年度当初の「紙キュラム」から、教育活動が進むにつれてＰＤＣＡサイクルによる加除修正を加え、年度末に完成を迎えるようなイメージで取り組む。子どもの育ちは「日常の教育活動」にあると捉えている。

③「生活科」「総合的な学習の時間」の実践研究

カリマネの中核となる教科・領域は生活科・総合であり、子どもの育ちの実現には欠かすことのできない教育活動である。子どもにとって遣り甲斐のある活動にするには、「単元の立ち上げ」や「子ども主体の学びにするための教師の支援」が重要となる。『カリマネ研修会』と併せて『生活科・総合における活動研修会』等の実施についても、検討していかなければならない。

（２）授業における子ども主体の追究

①「校内授業研究会」

研究授業は一人一授業とし、できる限り全員が参加する。研究の窓口は限定せず、各自、学級経営の中核となる教科・領域を決めて実践を積み上げる。事前研究会は、授業者が自ら設定し、ＯＪＴによって「研究の３つの柱」を主軸に据えた授業づくりに重点をおく。事後研究会の運営については研究推進委員が中心となって行う。

②「七中校区　４校合同授業研修会」

単なる形式的な小中連携ではなく、中学校区を丸抱えにして、「子どもの育ち」を推進していく。子どもが本気なるような価値ある学びの創造や教師の支援について、４校で学ぶ。

研究の計画

月	活　動　内　容	主な研究内容
4	◆研究推進委員会	・研究の構想について ・「運動会」コンセプトの検討
5	◆研究全体会	・研究計画、提案授業、指導案　等
6	★授業研究会 ◆４校合同授業研修会	
7	★授業研究会 ◆研究推進委員会	・「全校宿泊体験」コンセプトの検討
8	★授業研究会 ★カリマネ研修会（適宜） ★生活総合検討会（適宜）	
9	★授業研究会 ★カリマネ研修会（適宜） ★生活総合検討会（適宜）	
10	★授業研究会 ★カリマネ研修会（適宜） ★生活総合検討会（適宜）	
11	★授業研究会 ★カリマネ研修会（適宜） ★生活総合検討会（適宜）	
12	★授業研究会 ◆研究推進委員会	・今年度の総括と研究紀要作成について ・「６年生を送る会」コンセプトの検討
1	◆研究全体会 ◆研究推進委員会	・学年部ごとの研究の成果と課題共通理解 ・次年度に向けての方向性
2	◆研究全体会	・次年度に向けての共通理解

※研究推進委員は、行事担当者とともに子ども主体の活動について検討する。